

Force を巡る自然主義小説 : Frank Norris と Don DeLillo

中野, 里美

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

108

(開始ページ / Start Page)

285

(終了ページ / End Page)

297

(発行年 / Year)

1999-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004884>

Force を巡る自然主義小説

— Frank Norris と Don DeLillo —

中野里美

Frank Norris のエッセイ The Responsibilities of the Novelist において Norris は “all the force of their splendid minds, every faculty other than the lost fiction faculty, must be brought into play to compensate for the lack.”⁽¹⁾ と述べ、作家は自分の内から湧き起こる force により作品を仕上げ ていく、いわば impelling force (推進力) で、創作意欲を高めるものとして Norris は捉えている。Norris はこの force を自己を高揚させる方向へ向かわ せている。Norris の Vandover and the Brute では Vandover はこの force に怯え、逆に自己を退化させてしまう。

また force は自然主義小説の流れを汲む作家の Don DeLillo が Vandover and the Brute と似たテーマの White Noise で使用している。Michael V. Moses は White Noise について “DeLillo gives greater, or at least more explicit, emphasis to the economic forces at work. In a consumer culture, wealth provides the illusion of invulnerability.”⁽²⁾ と、White Noise に見られる economic forces が不死身という幻想を与えている事に焦点を当 せている。Vandover and the Brute (1914) は Norris の執筆時期と出版時期 に多少ずれがあるが、執筆時期は1894-95とされており、Don DeLillo の White Noise (1985) は Vandover からほぼ一世紀を経たことになる。

force についての批評家たちの意見は多岐に分かれる。決定論に支配された 自然主義小説では Lee C. Mitchell の “Naturalist characters, on the contrary, are ever unable to forestall their own actions when a combination of inner and outer forces otherwise impels them.”⁽³⁾ というように force は 自分の力の及ばないものとして解釈される。人間への force の影響力は批評家 によって善と悪の方向性に意見が分かれる。例えば Richard A. Davidson は “Man is responsible for combatting evil and moving toward the good.” とした上で “It is man’s use of these forces that results in evil or

good.”⁽⁴⁾とその結果はその人次第としているが、Norrisの The Octopus では force の良い影響力について論じている。だが、Charles C. Walcutt は “The modern tragedy locates the opposing forces in society and the nature of man, where they are not quite so terrible.”⁽⁵⁾と、force を悪と見なさないまでも人間に対しては “opposing” と考えている。また Paul Civello は “in Vandover, nearly all the natural, instinctual forces we see are associated with evil: lust, greed, and self-interest.”⁽⁶⁾と force と evil の結びつきを述べている。

Vandover は force や、brute という force の変形に翻弄されながらも生きようと必死になっているため生の真実からは逆に遠ざかり、生の実体というものがつかめない。産業革命以後の変化しつつある社会概念を Norris は捉えながら、人工的な force、そして自分の内面から湧き起こる自己喪失の force に苛まれる世紀末の人間の姿を描いている。それは Norris が19世紀までの小説の表現方法に彼独自の新しい何かを探そうとしていた姿と重なるものであるかもしれない。本論では Norris と DeLillo の force の意味するものや主人公との関連について探り、二つの自然主義小説について考えてみたい。

II

Norris と同時代のリアリズムを含めて言えることであろうが、Norris の諸作品の第一の特徴は人間の内面の自然主義的なメカニズムを描くことにあったと思われる。

Norris の Vandover and the Brute では Vandover は社会に適応できず、自己とその経験が結び付いていかない。Vandover は人間に対する社会の抑圧的な force を拒絶することも受容することもできず、Vandover の存在は浮遊する。Norris の Vandover and the Brute は Vandover の回想から始まる。

It was always a matter of wonder to Vandover that he was able to recall so little of his past life. With the exception of the most recent events he could remember nothing connectedly. (p.3)⁽⁷⁾

Vandover は物事を関連づけて思い出すことができない。ただ幼い頃に母が死

んだことだけは唯一明確に覚えている。それは Vandover にとって “one of these incidents might be a great sorrow, a tragedy, a death in his family.” (p.3) という大きな衝撃だったからである。Vandover はこの時に人間の死というものをはっきりと認識する。また死にたいして生を認識するのは教会での牧師の言葉で, “all women in the perils of child-birth.” (p.10) という, 生命の誕生には死の危険が伴うことに疑問を持つ。これは Vandover の知や性の目覚めであり, 父の書齋で百科事典の産科の項目を調べる。Vandover はその書齋で “Home Book of Art” も目にする。そこに掲載された絵画は Vandover の情緒に訴えかけるものであった。

There were a great many full-page pictures of lonely women, called “Reveries” or “Idylls,” ideal “Heads” of gipsy girls, of coquettes, and heads of little girls crowned with cherries and illustrative of such titles as “Spring,” “Youth,” “Innocence.” (p.12-13)

芸術に興味を持ち, 絵の上手な Vandover は他にも家の中で一人で芝居したり, 文学にも魅かれて話や詩を書いたり, 元来情緒的な Vandover はこれらの絵を見て以来強く絵画に興味を持つ。絵にも才能があるとされた Vandover は, ならば何故絵画を中心に自己を確立させて生きることができなかったのか。パリに留学したいという Vandover を説得して大学に行かせた彼の父にだけ責任があったのだろうか。それは Vandover が社会と個人の生活のバランスをとることができなかったことに原因がある。彼個人が趣味の範囲で絵を描くことは得意とするが, 社会的に活動しようとする, 社会の機構や様相を情緒的にしか捉えない Vandover には社会は適応しにくい場といえる。

Vandover の自己を取り巻く環境に大きく変化が現われたのは Vandover が大学に入学して以降である。Vandover の世界が広がると同時に社会での適応が困難であることが読み取れる。家の中で父と家政婦だけに (Vandover の姉の存在が Norris の記述から一か所だけ記述されるがそれ以降全く姉については触れられない) 囲まれていたのが友人も大勢できてアルコールやギャンブルにも手を出す。この頃に描いた Vandover の絵は “The Remnant of an Army” という殺伐とした絵を描いたり, 溺死体のあがった浜辺を表現し, あ

る環境に置かれて適応できない状況を描いている。Vandover の自己の社会の中での立場の認識は曖昧だが感覚的に捉えて絵に表現している。

Vandover にとっては絵を描くことが自己確認なのである。新しい環境に馴染んでいたはずが Vandover が遊び半分に付き合っていることを知った Ida Wade の自殺により Vandover の生活に破綻を来す。Vandover は感覚的にしか彼女の死を受け止められないので、ただ罪の意識に苛まれるのである。その Vandover に “brute” への意識が芽生え、 “a silent impotent rage against himself and against the brute in him that he had permitted to drag him to this thing.” (p.106) と自分に怒りを感じるのと同時に自分が “another person” に思えて怖くなる。その自分の “brute” の意識は社会に対する意識であるが周囲を認識するに至ってはいない。Vandover の思考は自己の内面へと向かっていく。ここでの “brute” は force の一種とも考えられ、悪の方向性を持つ force である。この “brute” は機械文明をも表現している。

父の勧めで “Coronado Beach” への船旅に出た帰途で Vandover を乗せた “the Mazatlan” は遭難する。死に直面した人間を前に “huge living creature” のこの船は “brute” と表現される。

The great hoarse roar dwindled to a long death rattle, then to a guttural rasp; all at once it ceased; the brute was dead—the Mazatlan was a wreck. (p.135)

機械文明の “brute” に煽られ人々は必死で生きようとする。悪である “brute”, “the Mazatlan” は沈没する。社会は人々から成り立つもので、社会が滅びゆく時は人々も同じである。“brute” を抱えてしまうと消滅して (死んで) しまうのは免れない。同じ “brute” を抱えてしまった Vandover の結末を暗示しているが、Vandover には生きたいという欲望が膨らんでくる。だが生きたいと強く願い、欲望のみ突出した彼の生は空疎なものとなる。それは彼のアイデンティティを確立させる絵との関係に表現される。

再起をかけて絵に取り組もうという気持ちを抱かせたのは Vandover の父の死である。父の死に遭遇して自分の保護膜のようなものが取れ、社会の force に直面させられる。

Toward eleven o'clock, however, after the suppressed excitement of the last hours, as he was going to bed, the sense of his grief and loss came upon him all of a sudden, with their real force for the first time, and he threw himself upon the bed face downward, weeping and groaning. (p.156)

この force の作用は Norris が既述のエッセイで表現していたような、Vandover の向上に繋がるような効力があり Vandover は絵にもう一度携わっていかうと決心する。自己にとらわれ、周りの動きが理解できない者に世の中や他人を描けるはずもなく、他人が理解できないということは自分をも見据えることが困難なことでもある。加えて父の死後、友人の Geary に財産を騙し取られ、Vandover の生きたいという欲望が消えてより安楽に死を選ぼうとするものの自殺に失敗する。そして逆に生に執着する。Vandover の生への執着は絵への執着である。しかし “it was not too late to save himself if he only could find help, but he could find no help.” (p.219) で、自己のそして社会認識の欠如から force に翻弄され立ち向かうことができない。

その Vandover を獣へと退化させるのは今一度の force による。

It was Life, the murmur of the great, mysterious force that spun the wheels of Nature and that sent it onward like some enormous engine, relentless; an engine that sped straight forward, driving before it the infinite herd of humanity, (中略) driving it recklessly, blindly on and on toward some far-distant goal, some vague unknown end, some mysterious, fearful bourne forever hidden in thick darkness. (p.230-231)

“Life” そのものが生物のように本能という車輪を回転させていて、社会から自己の存在が遊離した Vandover には屈服するしかない力である。Vandover の欲望のみを載せて “Life” は Vandover の精神から垂離していき抑制が利かなくなっていく。人間の理性を喪失し欲望のままに生きる Vandover は獣と化す。W.B.Dillingham は文明が変化しようとも人間の中の相反する衝動は永遠に存在するとしている。⁽⁶⁾ Vandover の獣化は様々な

欲望を満たそうとする人間の普遍的な姿を端的に表現している。当時の鉄道王はスペンサーの社会進化論を用いて会社の合併吸収を適者生存の考えに当てはめて正当化した。NorrisはVandoverが適者生存に負けるということでスペンサーの考えに影響を受けているのではなく、“Fundamental to all ethical progress, Spencer believed, is the adaptation of human character to the conditions of life.”⁽⁹⁾にあり、社会に適応するというのは自己の利益を追求することではなく、主体と客体とのバランスを取ることなのである。体系的な知の習得をし損ねたVandoverは生に執着し、自分の存在を確立したかったのである。

Ⅲ

Norrisの19世紀末の社会は知への欲求が高まり、結果生じた機械文明に生や本能が抑圧され人間が翻弄される姿が浮き彫りになったが、Don DeLilloのWhite Noiseでは機械文明以上に情報化社会が人間の生に介入している。逆に人の生死さえもメディアが創造するといっても過言ではない。DeLilloに見られるforceは情報化社会のメディアが担っており人間の感性が失われているからで、人間の経験という原初的な方法によってのみ自己の存在や生を確認できる。メディアが現代社会ではforceとなっていると主人公Jack Gladneyに説明するのはJackの教えるCollege-on-the-Hillの同僚Murrayである。

I've come to understand that the medium is a primal force in the American home. Sealed-off, timeless, self-contained, self-referring. (p.51)⁽¹⁰⁾

メディアというforceは時間や空間を超越しているため、現実と虚構の境界がない。メディアは家庭という限られた狭い範囲の最小の社会ですら十分にその機能を果たし、テレビのニュースもどこか信憑性に欠けてくる気さえする。またテレビの中心にあるのは映像と言葉である。映像と言葉の乱発で人々から判断力が失われる。それは“People get brain fade. This is because they've forgotten how to listen and look as children.” (p.67)と、まるで脳が退化

してしまうような危機感が読み取れる。Murray はまたテレビの影響により “For most people there are only two places in the world, where they live and their TV set.” (p.66) と、人々の生きる世界やその認識が狭くなっていることも見通している。

DeLillo の表現した force について Paul A. Cantor が次のように解釈している。

But as DeLillo probes the sources of the Nazi regime’s power, he sees at work forces that are similar to those he observes in American Popular culture. The obsession with sex and violence in rock music is a response to the same spiritual vacuum that Nazi myth and ritual tried to fill.⁽¹¹⁾

Murray が前述したようにメディアが White Noise の force である。この force は Norris に見られたものと同様に善の方向にも悪の方向にも向かう。ここではメディアを利用したナチとポップ・カルチャーが同じ force を担っていると捉えられる。この force も Norris の場合と同様に人間の感覚を奪い、自己同一性を確立できないようにさせてしまう。White Noise の随所に唐突に固有名詞の羅列が見られ、Jack の潜在意識にあるものが時々現われるようである。これは完全にメディア（コマーシャル）の影響が大きく、Jack の頭脳で何かを把握し考えがまとまると、テレビのように思考途中でコマーシャルが入るのである。Norris の描いた Vandover のように、記憶や思考に連続性が見られない。間断な思考では自分の姿や欲求でさえも理解し難くなるのではないだろうか。理性と本能のバランスを崩しては生きる方向性を見失う。

またテレビに映る事件事故はその鮮烈な映像で人々を過剰に刺激し麻痺させる。次第に人々はテレビの刺激に何の反応も示さなくなり現実の出来事であっても虚構と誤認する。実際に Jack の住む Blacksmith でタンク車の脱線事故が発生し、空気中に毒物が伝染する可能性が出て避難を余儀なくされても、避難民にはシミュレーションのように思え、テレビでその事故を放映しなかったことから現実なのかどうか理解できない。虚実が綱交ぜになり、そこで立ち止まると前進していくことができない。また目に映るもののみならず、その事故後、医療検査を受けて診断の結果から体内に異状ありと宣告され医師から説

明を受ける Jack の耳には医師の言葉は意味不明であったり、Jack には無意味に聞こえるものばかりである。五感を伝わって入る情報は、虚構によって形成された社会に幽閉されている Jack には真偽の程は判断し難い。なぜ Jack は自分の感覚ですら信用できないのか。それは Jack 自身、自分の姿を偽り作り上げているからである。

Jack は妻の Babette や 4 人の子供と Blacksmith に暮らし、College-on-the-Hill という大学で 1968 年 3 月に彼自身でヒトラー学科を創設して以来教え続けているが、彼は本名の Jack Gladney を大学では J.A.K.Gladney と変えている。それは学長のアドバイスで、またヒトラーについて教える者らしく体重を増やして恰幅をよく見せた方がいいとの案に従う。またその大学の教授は皆、黒いガウンも着ることになっている。Jack はそれらに加えて黒メガネを掛けることにしている。自分を偽らねばならない理由は Jack はヒトラー学の権威であり、またその学生はドイツ語が必修であるにもかかわらず、実は Jack は全くドイツ語が理解できないことにあった。自ら虚像を作り上げそこに逃げ込んだ Jack は “I am the false character that follows the name around.” (p.17) と実体のなさを痛感している。虚構の社会の弊害を感じながらもその虚構の中に沈み込んだ人間は自己の存在を虚構に求めて尚かつ利用するので、いつまでも自己確認ができない。

虚構の社会で遊離しているのは彼の研究対象のヒトラーも同様である。ヒトラーの独特な一定のスタイルからは彼の本質が見えてこない。虚像を作り上げていたといえる。Jack はそんな彼を “The man may have felt himself imprisoned in more ways than one.” (p.31) と捉え、ヒトラーが自分を偽り虚像を作っている様子に自分の姿を重ねている。また Jack の娘の Denise もサンバイザーを被ることで “Something about the visor seemed to speak to her, to offer wholeness and identity.” (p.37) と、サンバイザーで言葉の欠如を補足し自らのアイデンティティを表わそうとしているのである。Jack 以下彼らは自己のアイデンティティを模索している。

自己の存在を逆に言葉で確認する者もいる。ヒトラー学会が College-on-the-Hill で開催されることになりドイツ人も大勢集まることから、Jack は Murray に紹介された Howard Dunlop にドイツ語を教わる。その Dunlop は Murray と同じアパートに住んでいるが Murray によると部屋から一歩も出て来ず世間との接触を絶っており、自分の世界に閉じ籠ってい

る。彼は Jack にレッスンをする時 “the transformation in his face and voice made me think he was making a passage between levels of being.” (p.32) と Jack にドイツ語を教えることで虚像を脱皮するかのようである。

Jack は同じ教えるという作業をしてもヒトラー学に自己の知の欲望を投影させることができないので権威だという偽りの虚像を仕立てなければならない。だが Dunlop は自分の内なる欲求に従いドイツ語を習得したのだから虚像を作る必要はなく、普段は社会の虚構の中で生きていることを見据えているので部屋から出ず、ドイツ語を話すことが虚構から抜け出し実在する手段なのである。Dunlop と同様にメディアの虚構を見抜いているのが Jack の息子の Heinrich で、14才ながら Jack や Babette より大人びた態度をみせる。彼はタンク車脱線事故後に避難した先で、事故後の混乱で動揺している人々に前に事故についての皆の質問に逐一説明を施す。その演説をすることで “Heinrich seems to be coming out of his shell.” (p.133) と、Dunlop と同様に殻から抜け出てくるのである。彼も言葉を駆使することで自己の存在を証明する。人のアイデンティティは言葉により培われるもので、他国を侵略する際もまずその国の言葉を失わせるからである。メディアという虚構の世界を通した言葉は無意味で人々の存在を稀薄なものにすり替える。自己のアイデンティティを保つためには自らを語る言葉が必要となる。

Jack は言葉の空疎な force に抑圧されているので自分の生が実感できないでいる。彼の心は絶えず “Who will die first?” (p.30) ということにとらわれている。Murray は Jack に “In cities no one notices specific dying. Dying is a quality of the air. It’s everywhere and nowhere.” (p.38) と、死が虚構の一種であると話す。メディアが “waves and radiation” であるのと同じく死も “air” の本質であり、Jack には生と同じく死も把握できない。ポップ・カルチャーが専門の Murray には虚構が十分理解できる。Jack の大学の同僚で神経化学が専門の Winnie も、死を理解し、 “Isn’t death the boundary we need? Doesn’t it give a precious texture to life, a sense of definition?” (p.228) と、死があることで生を実感できるのだと認識している。Murray は他の人々と同様にスーパーマーケットを彷徨い、Winnie は自意識が強くキャンパスを移動する姿を人に見られないようにしている。二人とも理性では捉えられたものが本能的には捉えられない。そのバランスの悪さに

Jack は死が頭では分かったつもりが心底納得するまでには至らない。

Jack を変えるのは妻の持っていた Dylar という薬である。Jack に生死の存在が僅かながらにも悟れるのはその Dylar に起因する。Dylar は死の恐怖が消滅するという薬でまだ実験中の試薬である⁽¹²⁾。Jack が “I have no body, I’m only a mind or a self, alone in a vast space.” (p.198) と、自分は肉体が無いように思え、従って “nobody” と一致する不安を抱いているのに対して、妻の Babette は豊富な肉体を持ち、その重量感が Jack に安心感を与えていたはずであった。本能的な安心感に包まれるため Jack には “The kitchen and the bedroom are the major chambers around here, the power haunts, the sources.” (p.6) と、食欲と性欲を満たす場所が重要であった。ところが Babette が街の老人たちに歩き方や座り方を教える様子がテレビに放映され、Babette の姿が虚構になってしまうと Jack は不安に取憑かれる。その上 Babette 自身も死の恐怖が払拭できず、Dylar 欲しさに Dylar の製造者である Mr. Gray と関係を持ったことを Jack は知り、Mr. Gray の暗殺計画を練る。Jack の動機はメディアという force に冒されている死（の恐怖）を自らの肉体で消滅させたいということと、知識を得た人間が DeLillo の言葉でいう “reverse Darwinism” (p.15)⁽¹³⁾ に翻弄され、進化しすぎた理性は感性を抑制できないことを打開したかったことにある。

I tell Murray that ignorance and confusion can't possibly be the driving forces behind family solidarity. What an idea, what a subversion. He asks me why the strongest family units exist in the least developed societies. Not to know is a weapon of survival, he says. (p.81-82)

最小の社会である家族の中でなら事実というものを把握できるはずであった。だが家族の人間の事にも知り得ない事実が明白となり、知ってしまった以上知らぬ振りにはできない。テレビの事件事故で人間の死を知れば知る程、死が分からなくなるというパラドックスに加えて、家族の中にまで浸透する虚構の全貌を明らかにしたかったのである。

Mr. Gray の暗殺の直前までやはり Jack の頭脳は虚構の force に毒されている。というのも Jack の Mr. Gray 暗殺の想像がテレビのシーンのように頭

を過る。だが Jack を現実を目覚めさせたのは Mr. Gray の振り返りにあったことによる。生死は虚構を容易に超越できることが体験によってのみ理解できるのである。Jack は自分の中の抑圧を解放させ、本能に従うことで自分の隠蔽された姿を知ることができる。だからこそ自分の体から流れる血を見て、一端は殺しかけた Mr. Gray を助けるのである。Jack には完全に虚構から脱出することは不可能であるが、虚構の有様を理解し死の恐怖は払拭することができる。Jack の息子の Wilder が最終章で三輪車を暴走させバランスを失い土手から小川に落ちる様子で、本能のままに生きる人間の姿が暗示される。⁽¹⁴⁾ 幼い子供には十分な理性が備わってはいないからだが、本能のままも、抑圧された理性に縛られているものどちらも難しい。自然の夕日を見ても人によって感じる感じが違い、スーパーマーケットで僅かに商品の配列が変化しただけで右往左往する人々の姿からは自分にとっての真実を見極めるのも難しいことが示される。⁽¹⁵⁾

IV

DeLillo は雑誌のインタビューにこう答えている。「危機に直面した時代に生きること。それが私の小説を作り上げる」と、そして作家のあり方については「この先何が起こるのか予想するのではなく、今現実に関何が起こっているかを、誰よりも先に語るのが、作家に与えられた任務だ」⁽¹⁶⁾と。また「小説言語に愛情をそそぎ込んでいる」(p.71)とも言っている。言語が尊重されない世の中には Jack の娘の Steffie のように寝言でコマーシャルの文句を呟いたり、道路を歩きながら薬の名前を意味もなく口ずさむ女性のような人々が蔓延することだろう。情報過多でメディアに支配された生活を送れば、誰も虚構と現実の境界がますます引けなくなる。その中で確固たる自分を見据えるのは至難の業であり、何を信じればいいのか自分でさえも分からなくなってしまう。DeLillo は現代人という立場から虚構の中での自己のアイデンティティを問うている。一方 Norris も既述のエッセイの中で小説家についてこう記している。“The difficult thing is to get at the life immediately around you—the very life in which you move.”⁽¹⁷⁾ 目の前で起こっていることは少し離れてみないと分かりにくいことを端的に表現している。言葉の真実を捉えて自分なりの真実を見出すことの意義を提示しているのである。

Norris は資本主義的な機械文明の force によって、また DeLillo は情報化社会のメディアという force によって、感性が失われていく危機感を描いている。DeLillo の描く情報化社会はまず過剰な情報が人々に放出され、それが個人の人格の形成に歪曲して受け入れられ、その人本来の姿とは違った別個の虚像が出来上がる。そういう情報化社会の中で失われた感性からいかに想像力を養い他人とコミュニケーションをとっていくかを問うている。

〈注〉

- (1) Frank Norris, The Responsibilities of the Novelist (New York: Kennikat Press, 1967) 31.
- (2) Michael Valdez Moses, "Lust Removed from Nature," New Essays on White Noise, ed. Frank Lentricchia (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 73.
- (3) Lee Clark Mitchell, Determined Fictions: American Literary Naturalism (New York: Columbia University Press, 1989) xii.
- (4) Richard Allan Davison, "Frank Norris's The Octopus: Some Observations on Vanamee, Shelgrim and St. Paul," Critical Essays on Frank Norris, ed. Don Graham (Boston: G.K.Hall & Co., 1980) 109.
- (5) Charles Child Walcutt, "The Naturalism of Vandover and the Brute," Critical Essays on Frank Norris, ed. Don Graham (Boston: G.K.Hall & Co., 1980) 175.
- (6) Paul Civello, American Literary Naturalism and Its Twentieth-Century Transformations: Frank Norris, Ernest Hemingway, Don DeLillo (Georgia: The University of Georgia Press, 1994) 36. また June Howard は force と brutality を結び付けて捉えている。June Howard, Form and History in American Literary Naturalism (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1985) 66. Barbara Hochman は Vandover and the Brute と The Octopus にみられる force についてその本質は解明できず、また主人公たちと同様に読者にも分かり得ないものとしている。Barbara Hochman, The art of Frank Norris, storyteller (Columbia: University of Missouri Press, 1988) 10.
- (7) Frank Norris, Vandover and the Brute (Lincoln: University of Nebraska Press, 1978) 3. 引用は本文中にページ数を記載。
- (8) William B. Dillingham, Frank Norris: Instinct and Art (Lincoln: University of Nebraska Press, 1969) 58.
- (9) Richard Hofstadter, Social Determinism in American Thought (Boston: The Beacon Press, 1964) 40.
- (10) Don DeLillo, White Noise (New York: Penguin Books, 1985) 51. 引用は本文中にページ数を記載。
- (11) Paul A. Cantor, "Adolf, We Hardly Knew You," New Essays on White Noise, ed. Frank Lentricchia (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 58.
- (12) 上岡伸雄氏によればメディアにより死の恐怖がなくなって死を「他人事」にしてしまうという究極の「不死」を、メディアが売ることに最も恐れを感じているとし

ている。詳しくは上岡伸雄「電子メディア時代のアメリカ文学」「文学アメリカ資本主義」(南雲堂, 1993)を参照のこと。

- (13) “reverse Darwinism” は “I wonder if the thought itself is part of the nature of physical love, a reverse Darwinism that awards sadness and fear to the survivor” と表現される。
- (14) Wilder の知る言葉は25個の単語ということから人間の原始的な姿により近いといえる。また他の主要な登場人物の作品中の役割とその意味についてまとめると次のようになる。
- Jack Gladney---(Mr. Gray を殺しかけ逆に自分の血をみることで、「傷」を負わなければ新しいより良い感受性や思想などが得られないという人間形成の普遍性を表現し、同時に高度情報社会の中で複雑な様相を呈している。)
- Babette--- (アイデンティティを獲得できず不安に駆られて、アイデンティティ獲得に重要な感性を麻痺させる Dylar を服用する。墮落、肉体の悲哀を表現。)
- Heinrich--- (経験は少ないものの感性、知力から現実を解釈する能力を持つ。)
- Denise--- (アイデンティティを得る可能性を持ち、希望を表現。)
- Steffie--- (無垢も持たない、情報化社会が生んだ奇形児。)
- Wilder--- (経験、知力の少ない原始的で無垢な存在。)
- Murray--- (Jack の鏡となり、Jack について説明する役割を持つ。)
- Dunlop--- (アイデンティティを得たかのようにだが現実との関わりは見られない。)
- Winnie--- (Dunlop と同質で閉鎖的な世界に埋没している。)
- Mr. Gray--- (Norris で人間を脅かした機械文明という brute やさらに大きな force は、DeLillo では細分化し我々の生活に密着して科学や医学を通じて細胞レベルにまで浸透してきた。その中で人々が感性や想像力から生み出した概念を有する存在。)
- (15) メディアの中に囚われてそこから脱却し難いことは、John Frow, “The Last Things Before the Last: Notes on White Noise,” Introducing Don DeLillo ed. Frank Lentricchia (Durham: Duke University Press, 1991) 183.
“The world is so saturated with representations that it becomes increasingly difficult to separate primary actions from imitations of actions. Indeed, it seems that it is only within the realm of representation that it is possible to postulate a realm of primary actions which would be quite distinct from representation” と記述されている。
- (16) 『来たるべき作家たち』(新潮社, 1998) 72.
- (17) Frank Norris, The Responsibilities of the Novelist, 16.